

宮沢賢治における恋愛と宗教

—「丁丁丁丁丁」をめぐって—

中野新治

殺々尊々尊

ゲニイめたうたう本音を出した

やってみろ 丁丁丁

きさまなんかにまけるかよ

何か巨きな鳥の影

ふう 丁丁丁

海は青じろく明け 丁

もうもうあがる蒸気のなかに

香ばしく息づいて泛ぶ

巨きな花の蕾がある

たとえば大岡信氏は「デーモンの唸り声が聞こえてきそうに感じ
た」と評し、周到な分析を行っている。氏の指摘にもあるように、
この作品の魅力は、前半の激しい感情を伴った抽象的なイメージが
末尾四行の生命感に満ちた華麗な花のイメージに変容するところに
もあるのだが、今問題にしたいのはこの「巨きな花の蕾」である。
詩の享受としては、病床にあった賢治に思いをはせながら、幻想的

宮沢賢治が病床にあつて筆を執つたいわゆる疾中詩篇は、この詩
人を論ずるにあつて不可欠のものであるが、中でも「丁丁丁丁
丁」は傑作としてよく知られている。

丁丁丁丁丁

丁丁丁丁丁

叩きつけられてゐる 丁

叩きつけられてゐる 丁

藻でまっくらな 丁丁丁

塩の海 丁丁丁丁丁

熱 丁丁丁丁丁

熱 丁丁丁丁丁

(尊々殺々殺

殺々尊々尊

尊々殺々尊

宮沢賢治における恋愛と宗教 —「丁丁丁丁丁」をめぐって—

な絵画のような不思議な美しさを味わえば充分であるかも知れない。が、やはりこの花の蕾が具体的にどういうイメージを喚起するかは取り上げるに価する問題であると思われる。

筑摩版校本全集において、校訂者小沢俊郎氏が「三原三部」（昭3・6）の第一部に現われる「……南の海の／南の海のはげしい熱気とけむりのなかから／ひらかぬまゝにさえぎえ芳り／つひにひらかず水にこぼれる／巨きな花の蕾がある……」との類似を指摘して以来、この「巨きな花の蕾」は伊藤ちゑという女性を指し、そこには「賢治の他の作品には見られぬ心の高揚と熱い愛恋の気持ちとがこめられ」ており、それは「成就しない貴重な恋」のシンボルであるとみなされるようになった。

昭和三年六月十二日から十四日まで、賢治は伊豆の大島に伊藤七雄、ちゑの兄妹を訪れている。農芸指導のためであるが、妹ちゑと見合いの意味もあり、「結婚するのならあの女性だな」という証言も残っているところから、右の説は強い説得性をもつことになった。病床の中で熱にあえぎながらも果せなかった恋愛に思いを馳せ、それを詩に昇華した賢治を想像することは、読者として心安らぐものさえあるのである。が、にもかかわらず、このついに開かぬ「巨きな花の蕾」を晩期の賢治を彩る恋情のシンボルとして読むには大きな疑問があるといわねばならない。

たとえば松山俊太郎氏は精密な論考「宮沢賢治と蓮」覚書」の中ですでに引用したような解釈を下しながらも、一方で「賢治の経歴とか作品に無知な人か、法華経信者であることを知っていて作品に暗い人に、この一篇だけを示せば全く異なる解釈をするのではない

かと思う」とことわって、大よそ次のような説を示している。

① この「巨きな花」は古代インドの「世界創成説」において「世界の母胎」ないし「世界」そのものを示す「巨大蓮」であり、それは後に仏典の「華嚴経」の「蓮華蔵世界」や、「梵網経」の「蓮華台蔵世界」に発達した。ゆえにこれは、やがて顕現すべき仏の真実の浄土である蓮華蔵世界をあらわすと解することができる。

② ①があまりに「華嚴」的でありすぎて、「法華経」の信者である賢治にふさわしくないとすれば、この「巨きな花の蕾」は「妙法蓮華経」の「蓮華」つまり、白蓮（ブンダリーカ）と解釈しうる。この白蓮は妙法日輪仏陀の三重の至上存在のシンボルであり、

人類の救済を約束するものである。

こうして松山氏はこの花を「女人への渴仰」の産物であるとは毛頭思えず、「イデアとしての花」であると結論づけながら、そのヴィジョンが「いじらしい恋情から」出てきたものであることは認めるのである。だが、松山氏は伝記的な通説を尊重しすぎているのではあるまいか。私はこの解釈は全く正しいと考える。論文中にもあるように、「女性的なるもの」を救済の原理とすることは賢治にはふさわしくないし、作品のより詳細な分析は通説の誤りを明証すると思われる。「賢治の経歴とか作品に無知な人」でなくとも、いや逆に、経歴や他の作品をよく知る者ならば、この花を宗教的なシンボルと読む方が自然なのではあるまいか。以下詳察してみたい。

二

まず、時間的な経過の問題がある。「[丁丁丁丁]」より先に、

大島行きの記念としての「三原三部」の第一部の終末部にこの「巨きな花の蕾」は現われるのだが、もしこれが「果たせぬ恋」のシンボルであるとしても、伊藤ちゑとの出会いの後に現われるのが通常の順序であろう。ところがこの花のイメージは、船が東京の港を出発して品川の海にさしかかった時に早くも現われるのである。詩が完成されたのは花巻に帰つてであろうから、順序はかまわないということも可能ではあるが、作品は題名に示すとおりに第一部が出港

から品川沖に出るまでの光景、第二部が大島での農芸指導の実際の光景、第三部が大島を出発したあとの海からの光景と明確に分けられており、それぞれ六・一三、六・一四、六・一五という日付もついている以上、花と恋のイメージが大島を訪れる前から登場することと考へることは極めて不自然であるといわねばならない。第三部に伊藤兄妹への思慕は明らかであるが、それは「おゝあなた方の上に／何と淨らかな青ぞらに／まばゆく光る横ぐもが／あたかも三十三天の／パノラマ図のやうにかかつてゐることせう」や「船にはいま十字のもやうのはひつた灯もともり／うしろには／もう濃い緑いろの観音崎の上に／しらしら灯をとますあのまっ白な燈台も見え／あなたの上のそらはいちめん／そらはいちめん／かゞやくかゞやく／狸々緋です」のように、なつかしさをこめた呼びかけとしてしっかりと表現されている。しかもここには俗なる感情としての恋情は排されている。伊藤ちゑの上にあるものは淨らかな青ぞらと光る横雲であり、それは天人たちの住むという三十三天（切利天）を連想させるのだし、夕やみ迫る伊豆の海に鮮やかなのは「十字のもやう」や「観音崎」という宗教的シンボルを冠せられた船のあかりや燈台

宮沢賢治における恋愛と宗教 — 「丁丁丁丁丁」をめぐって —

なのである。夕やけの一面の赤い輝きが宗教的な聖なる情感に燃えていることは明らかであろう。賢治は何よりも、病身をおして伊豆大島に農芸学校をつくりたいという兄と、それを支える妹の高い理想に心から共鳴しているのである。

詩に登場する三十三天のイメージは「銀河鉄道の夜」にも取入れられた賢治には重要な意味をもつものである。

しかも三十三天は

やっぱりたしかにそこにあって

木もあれば風も吹いている

天人たちの恋は

相見えてえん然としてわらってやみ

食も多くは精緻であつて

香気となつて毛孔から発する（「北いっぱいの星ぞらに」）

異稿 大13・8）

もし伊藤ちゑに賢治が恋情を抱いていたとしても、それは天人のようにほほえみを交すだけで充分満たされるものとしてあつたはずであつた。それはまた、すでに見た佐藤隆房氏の証言が「結局、おれと結婚する人があれば、第一心中の覚悟で来なければなりません、五十にならない今から永久に兄妹のようにして暮らす、そういう結婚ならしてもいいです」と続くこととも一致するのである。このような男女関係のシンボルとしては「巨きな花の蕾」は官能的でありすぎると思われる。病床で詩人が夢見たものは女性ではなく、やはり「自然」であつた。「丁丁丁丁丁」と同じく疾中詩篇に

収められた二つの作品を見てみよう。

たけにぐさに

風が吹いてゐるといふことである

たけにぐさの群落にも

風が吹いてゐるといふことである

(「病床」)

風がおもてで呼んでゐる

「さあ起きて

赤いシャツと

いつものぼろぼろの外套を着て

早くおもてへ出て来るんだ」と

風が交々叫んでゐる

「おれたちはみな

おまへの出るのを迎へるために

おまへのすきなみぞれの粒を

横ぞつばうに飛ばしてゐる

おまへも早く飛びだして来て

あすこの稜ある巖の上

葉のない黒い林のなかで

うつくしいソプラノをもった

おれたちのなかのひとり

約束通り結婚しろ」と

繰り返し繰り返し

風がおもてで叫んでゐる

(「風がおもてで呼んでゐる」)

賢治にとって病いの床に臥すとは「たけにぐさ」に会いに行けないことなのであった。「たけにぐさ」は荒地に育ち小さな白い花をつけるケシ科の植物で、見はえのいいものでは決してないが、わずか二連のこの作品は、その単純な構成ゆえにいっそう「自然」からへだてられた詩人の悲しみを極だたせている。

「風がおもてで呼んでゐる」において、「自然」はより明瞭に多数の人格をもつ風として登場する。「風野又三郎」や「風の又三郎」を書いた賢治にとって、風は男女や大人と子供の別があるのに不思議はないし、風との交歓は人間とのそれよりもはるかに胸おどり心安まるものであった。童話「ポラーノの広場」(初期形)のキユーストは、フアゼーロの姉ロザーロとの結婚を少年たちから勧められてあわてて断わるのだが、ひとけのない元競馬場の宿直室に一人で住むキユーストが、風と結婚するにふさわしい作者の分身であることは明らかである。風と結婚する、とは何か。それは「おもてへ出て行く」ことである。風になびくたけにぐさも、みぞれまじりの風も、賢治に「出ておいで」と呼びかける。いわゆる結婚が、「家に入る」ことであり、自己と家族の日常性を守ることであるのなら、風との結婚とはその逆のベクトルを生きることである。つまり自己を限りなく拡散させ、「かがやく宇宙の微塵となりて無方の

空にちらばる（「農民芸術概論綱要」）ことなのだ。この言葉はたしかに難解である。だが少くとも、自己を守ることをやめ、「おもてへ出て行く」ことなしに、彼の実践運動も何もありえなかったことは確かであろう。「自然」が賢治を呼ぶのはその人間嫌いのためばかりではないし、女性に近づかぬ代償として「自然」との官能的な交流があったということにとどまるものでもない。それは理想に殉じようとする生のあり方そのものの呼び声なのであった。

三

「[丁丁丁丁丁]」にもどう。まず「丁丁丁……」という擬音（？）が目につく。これを大岡氏の指摘にもあるように病床での高熱との戦いを表わしたものと考えるとすれば、それは「雨ニモマケズ手帳」の冒頭に「当知是処／即是道場」（まさに知るべしこの処はすなわちこれ道場なり）と記されているように、熱や咳と戦う病床そのものが仏道修行の道場であり、そこでの苦しみが仏を供養することであるという強い自覚にもづくものであるにちがいない。手帳には「さらばこれ格好の／道場なり／三十八度九度の熱惱／肺炎流感結核の諸毒／汝が身中に充つるとき／汝が五蘊の修羅／を化して或は天或は菩薩成仏の国土たらしめよ」（9・10頁）とあって、この道場で賢治がまさに「叩きつけられ」ながらも「丁丁発止」と戦っていたことを明らかにしている。

そう考えることができれば、「藻でまっくらな 塩の海」という謎めいた部分を除いて「きさまなんかに負けるかよ」までは理解が可能である。ゲニイは genie であり、アラビアの物語に登場する

魔神を指すのだが、それが釈迦を誘惑した魔王波旬に通じるとすれば、「ゲニイめたうとう本首を出した／やってみる 丁丁丁／きさまなんかにまけるかよ」とは病熱の中での内なる仏と魔の熾烈な戦いを表わしていると読める。仏法に従うとはいいいながらこうして身を破り、肉親たちに多大の迷惑をかけ、現実には敗残者となつてしまった。愚かなことである。父の言うように現実を見すえて現世的な生き方をすべきではなかったか。私はすべてを誤つたのではないか……。前見の手帳の中に「修羅」という言葉がくり返し出てくることから考えても、賢治の中にこのような根本的な葛藤が渦まいていたとしてもおかしくはない。「ゲニイめたうとう本首を出した」とは、体中の力がなえるような自己の歩みに対する否定の声であつたかもしれないのである。

「波旬」は梵語パーピヤスの音写で「より悪しき者」の意味であり、漢語訳では極悪、悪者、殺者の例があるから、「尊々殺々」の尊が釈尊を指し、殺が波旬を指すと考えることも不可能ではない。大岡氏は尊属殺人を連想し、山本太郎氏は咳の擬音だとしているが、内なる仏と魔との闘争として読むことができるのではあるまいか。それはまた、「藻でまっくらな 塩の海」という表現や「巨きな花の蕾」とも無関係ではない。賢治の戦いは一貫して藻が海を一面に暗くするほど茂っている塩の海でなされており、巨きな鳥がその上を飛び去り、それを合図にするように闘争がひとしきりおさまつたあと、夜明けの海に立ち昇る蒸気の中に「巨きな花の蕾」が幻想的に現われるのである。

この「塩の海」とは何か。普通、海は塩からいに決つていたので

から、「塩の」と修飾されているだけで単なる実在の海とは区別されねばならないし、「塩の海」とは別の海があることも予想されることになる。であれば、この海とは松山氏の指摘する「世界の母胎」としての海であり、そこに咲き出た花とはこの世が仏によって荘嚴された世界であることを示す蓮華の花に他ならない。

この仏教的世界構図としての「蓮華蔵世界」は日本では東大寺の大仏（毘盧舎那仏）の蓮座に描かれているものが高名であるが、仏教辞典や、特に西村公朝氏の「仏の世界観——仏像造形条件——」によればその大よそは次の通りである。

まず、無数の風輪によって支えられた香水海がある。この海から一本の大蓮華が咲き出している。この大蓮華の上面はまた海になっており、その中にはまた小蓮華が無数に開花している。その一つ一つの上面も海であり、そこにはまた蓮華が咲き出している。これが限りなくくりかえされたものが蓮華蔵世界であって、この世が仏（毘盧舎那仏）の行願によって浄化荘嚴されていることを表わしている。その細部はどうなっているか。

蓮華の海の中中には一つの大きな島があり、これを須弥山という。この須弥山を輪になった連山がドーナツ状に七重にとり囲む。これを七金山といい、この連山の中はすべて香水の海である。七金山の外側は塩水の海で、鉄围山によって一番外をとり囲まれている。この塩水海の中に四つの大きな島がある。これを須弥四洲といひ、東弗婆提洲、南瞻部洲、西牛貨洲、北俱盧洲に分かれる。中心にある須弥山はふもとの最下部で二竜王によって守護され、その上に三夜叉宮、四天王宮があり、帝釈天をはじめとする三十三天の住

む切利天は最上層にある。無数の仏たちはさらにこの上空に住んでおり、われわれ人間は南の塩水海にある南瞻部洲に住んでいる。

こうしてみると、「丁丁丁丁丁」が蓮華蔵世界そのもののイメージによって成立していることは明らかである。「塩の海」とは人間の住む南瞻部洲をとり囲む海である。「三原三部」で「南の海」とあるのもこれであり、実在としての南の海である伊豆の海と二重のイメージになっている。それが「藻でまっくら」なのは仏の教えを真に理解しない人間の蒙昧のためであろうか。少くとも賢治は仏の住む香水海から遠い場所でも高熱にあえいでいるのである。

しかし、そのような暗い場所にも仏の光は射さぬはずがないし、そこをこそ寂光土とするために戦えと教えるのが彼の信じた法華経の教えであった。すでに見たようにそのなかばに倒れた賢治にとって今度は病いと戦いが仏道の修行であった。ゆえに、あの「梁塵秘抄」に「仏はつねにいませどもうつならぬぞあはれなる 人の音せぬあつきにほのかに夢にみえたまふ」と歌われた仏のように、高熱や咳にあえぎながら辛うじて夜明けを迎えた賢治をはげますように蓮の花は現われるのである。「香ばしく息づいて泛ぶ」「丁丁丁丁丁」（、「さえぎえ香り」（「三原三部」と、共に芳香が強調されるのも、それがもともと仏の住む七香海に開くものであるからにちがいない。

「三原三部」の場合、「甘ずっぱい雲の向ふに／船もうちくらむ品川（海）／海気と甘ずっぱい雲の下／なまめかしく青い水平線に／日に蔭るは船の列が／夢のやうにおのおのいとなみをする」という海の光景の描写の後にこの花の蕾が現われることに注意せねばな

らない。品川の海からはるか遠くの水平線を眺めそこに浮ぶ帆船の群を見た時、賢治の思いは海の上で日々の生計をたてている人々の上に馳せられたであろう。あれは漁をしているのであろうか。帆の白さが目にしみ、あそこにもあのような生活があるとしみじみ思う。ふりかえって自分の生活とは何だったのか……。それは宗教的な熱情につき動かされ夢を追いつづけた日々であった。しかもその夢は何一つとして果されたとはいえない。「そのまっくらな巨きなものを／おれはどうにも動かせない／結局おれではだめなのかなあ」（「境内」）や「わたくしは湧きあがるかなしさを／きれぎれ青い神話に変へて／開拓記念の楡の広場に／力いっぱい撒いたけれども／小鳥らはそれを啄まなかった」（「札幌市」）に代表される深い挫折感や孤独感を実践活動に入った賢治は早くから味わっていた。しかし、たとえ小鳥たちさえも彼の悲しみを知らないとしても、賢治の幻視の中にこの蓮華が消えることはなかった。それが薔のままついに開くことなく水に落ちたとしても、その芳香だけはかぐことができた。そのリアリティだけはすべてを失っても彼の中に残ったのであり、それが彼の「いとなみ」なのであった。

この蓮華蔵世界をたとえば曉鳥敏（明10？昭29）は次のように具体的に歌っている。

厳肅なる華の世界よ。

豊満なる華の万象よ。

万物すべて生き

光曜天地にみちてをる。

宮沢賢治における恋愛と宗教 — 「丁丁丁丁」をめぐって —

人と物とのへだたりなく

生物と無生物のけぢめもない。

すべてが生きてをる

一切が踊つてをる。

草木が語り

国土がうたふ、

瓦礫がさくやく

塵芥が叫ぶ。

大地から人が生れ

人の毛孔から国土が現れる。

神々は万物より化現して

不可思議光かゞやく。

（中略）

心眼この華の世界に開くる時、

万象光り、

山海に音楽ひびき

一人の世界は万人の世界となり、

個が種族となり、社会が個人となつて。

因陀羅網の互に影するやうである。

（「華厳三昧の中より」序歌 大11・9 香草社）

曉鳥敏は浄土真宗大谷派の秀れた学僧であり、花巻にもよく来た。賢治も十歳と十一歳の時の八月、大沢温泉で開かれた「我信念講話」に参加し、講師として招かれた曉鳥の話聞いていた。賢治

がこの「華嚴三昧の中より」を読んだという確証はないが、序歌に歌われた世界がそのまま彼の童話の世界であることはまぎれもないし、「一人の世界は万人の世界となり／個が種族となり、社会が個人とな」ることがその理想であつたことはくりかえす必要もあるまい。「嚴肅なる華の世界」のシンボルである「囚陀羅網」は帝釈天の宮殿を荘嚴する網であり、網目にはみな宝珠がつけられ、その一つ一つの宝珠にはまた他の宝珠の光が映り出され、無限に交錯し反映してたとえようもなく美しいものとされる。賢治にはこれを題材とした幻想的な作品「インドラの網」があるし、「あゝ東方の普賢菩薩よ／微かに神威を垂れ給ひ／曾つて説かれし華嚴のなか／仏界形円きもの／形花台の如きもの／覚者の意志に住するもの／衆生の業にしたがふもの／この星ぞらに指し給へ」（「北いっばいの星ぞらに」）大13・8と、夜空に蓮華蔵世界が描き出されることを望んだ詩も残されている。彼が華嚴経にも深く親しみ、「心眼この華の世界に開くる」境地にあつたことは明らかである。

かくして、伊豆大島に向う海上であらわれた蓮華の蕾のヴィジヨンは病床に臥したあともなお賢治に親しかったということができ
る。
賢治の後半生は、すべての人々にこの世が仏によつて荘嚴された蓮華蔵世界であることを知ってもらうために費やされたということもできるのだから、それが挫折に終り、ついに蕾は開花しなかつたとしても、そのヴィジヨンは熱にあえぎ心の葛藤に苦しむ賢治を慰めるようにたびたび現われたのではあるまいか。「あゝ今日ここに果てんとや／燃ゆるねがひはありながら／外のわぎにのみまぎらひ

て／十年はつひに過ぎにけり」（「あゝ今日ここに果てんとや」）という悔恨と、「手は熱く足はなゆれど／われはこれ塔たつるもの／滑り来し時間の軸の／をちこちに美ゆくもなりて／燦々と暗をてらせる／その塔のすがたかしこし」（「手は熱く足はなゆれど」）という自負のあいだを揺れ動いていたこの求道者をこの蕾はやさしく慰撫したにちがいない。

二十五歳の春に、賢治はこう書きつけている。

ちいさな自分を劃ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと万象といつしよに

至上福しにいたらうとする

それがある宗教的情操とするならば

そのねがひから砕けまた疲れ

じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと

完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする

この変態を恋愛といふ

そしてどこでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を

むりにもごまかし求め得やうとする

その傾向を性慾といふ

（「小岩井農場 パート九」大11・5）

この恋愛や性欲を断罪するような断言は、逆に当時彼に「完全として永久にどこまでもいつしよに行かうとする」者がいたことを臆測させる。境忠一氏はその女性が当時花巻在任の実在の女性であり、単なる片想いの対象ではなく、二人の結婚を予想した人もあったといわれるほどの仲であったことを指摘しているが、ここで賢治が自己の経験を通して、かつて北村透谷（明元ノ明27）が主張したと同じく、恋愛の本質を、自己の理想を果せなかつた者がその代償として自己を支えようとする行為であると考えたことに注目せねばならない。この定義が正しいかどうかはわからない。誰もが万人の幸福を夢想し献身するとは考えられないが、恋愛は誰もが思慕するものだとすれば、それだけでこの定義は危うくなるからである。しかし、賢治はそう看破したのだし、そう看破した以上、万人の幸福↓恋愛↓性という位階を下ることをこれ以後潔しとはしなかったのである。「巨きな花の蕾」はそのようにしてついに病床に横わった者にかぐわしく訪れたのであった。

注(1) 大岡信「丁丁丁丁」(『日本詩歌紀行』 昭53・11 新潮社)

(2) 入沢康夫「解説」(『新修宮沢賢治全集第七巻』 昭55・

4 筑摩書房)

(3) 松山俊太郎「宮沢賢治と蓮」覚書」(『ユリイカ』 昭

52・11号 青土社)

(4) 佐藤隆房「宮沢賢治」(改訂増補版) (昭45・9 富山房)

(5) ただし、前述の通り、実際には六月十二日から十四日まで

宮沢賢治における恋愛と宗教 —— 「丁丁丁丁」をめぐって ——

であったと考えられる。校本全集第十四巻年譜参照。

(6) 『総合仏教大辞典』 (昭62・11 法蔵館)

(7) 賢治は初期作品や青年期の書簡の中で、くりかえし魔王波旬に言及している。「(峯や谷は)」、大7・7・24 保坂嘉内あて書簡参照。

(8) 山本太郎「解説」(『旺文社文庫版宮沢賢治詩集』 昭44

・12)

(9) 山本太郎氏も「善きつげニイ(悪魔)との絶えざる闘いを感じとることもできる」と指摘しているが、詳細な言及はない。(8)と同じ)

(10) 『望月仏教大辞典』 (昭29・11 世界聖典刊行協会)

(11) 西村公朝「仏の世界観——仏像造形の条件——」(昭54

・12 吉川弘文堂)

(12) 境忠一「宮沢賢治の愛」(昭53・3 主婦の友社)

(13) 北村透谷「厭世詩家と女性」(明25・2) 参照